

【解答】

E・W パーージェスと H・J ロックは、1945 年に著書『家族-制度から友愛へ-』において、制度的-友愛的、権威的-民主的、家父長的-民主的、家族主義-個人主義、安定的-不安定的といったいくつかの指標を駆使して、前近代家族から近代家族への変容について展開している。そして、近代家族の特徴を一言で言い表すならば、「友愛家族」という言葉で示される。その特徴は、家族の個々の成員の幸福や願望が重視され、行動の自由の最大限の保障を志向すること、親族集団や近隣のコントロールから自立するがゆえに、外部的なファクターによる安定性を減少させた不安定な存在であることを指摘した。経済成長に最も効率的な制度であった性別役割分担や夫婦や親子の愛情という絆が強力なボンドとなって、近代家族が内包する不安定性を克服するという形で形成されてきた。

また、家族社会学を専門とする山田昌弘も、現代社会における家族は「家族的なるもの（信頼できる関係性）を求める欲求の強まり」と「家族の不安定性（不確実性・不公平性の増大）という現実」の2つの矛盾した方向に引き裂かれつつあると指摘する。世知辛い現代だからこそ、家族を求める欲求は弱まっていない。弱まるどころか求める家族の理想的基準がますます高くなっている。一方、現実の家族を巡る状況では、夫が稼ぎ主で家族を金銭的に十分に養い、妻が家事・育児・介護の全てを担当するという性別役割分業が維持できなくなっている。つまり、理想的に思える家族はなかなか手に入りにくくなっている。この理想的家族を求める欲望の高まりと不安定化する家族の現実が、現代家族の様々な問題を作り出している。

1950 年代半ばに T・パーソンズは「男は仕事、女は家庭」といった性別分業を前提とした「核家族」のもつ典型性が、女性たちの職場進出の時代を迎えて、前提自体が崩壊し、かつ、夫婦と未婚の子を中心とする「核家族」の家族としての典型性そのものも崩壊していると指摘している。しかし、同時に理念型としての性別分業、理念型としての核家族は強固に存続しており、それゆえに現実世界に矛盾が山積みしており、女性たちが結婚を回避したり、離婚を志向したりする理由の一つにもなっている。

かつて、「一家の大黒柱」という言葉は家族を持った男性への褒め言葉であり、「一国一城の主」は男性が仕事での成果を家族や親族に自慢できる目標ともなっていた。しかし、1990 年代以降の経済事情がそうした男性の夢を崩壊させている。また、仕事で苦勞せず家事や育児に専念できる「専業主婦」は多くの女性の憧れであったが、現代では牢獄のような捉え方をする向きもある。

現代社会において、旧来型の男女性別分業型の家族の役割は、前提から崩れてしまっているのが実情である。では最後に、その地平から何を構築できるのか。正解があるわけではないが、稼ぎ主の夫とケアを担う妻という性別役割分業モデルの根底にある「共依存」の関係の改善が第一義である。「男性には〇〇はできない。女性に任すべき」「女性に〇〇はできない。男性の仕事でしょ」といったように仕事や生活の諸事を男女で分担を決めてしまう社会や教育からは、自立的な家族は生まれない。山田昌弘の見解に戻るが、家族的な信頼関係を希求しつつ、男女役割分担がもたらす不安定性を減らしていく努力が求められる。そのヒントとして LGBTQ の人々の家族観が参考になる。

文字数：1402 字

【引用・参考文献】

岩間暁子・大和礼子・田間泰子『問いからはじめる家族社会学:多様化する家族の包摂に向けて』, 有斐閣,2015

布施晶子『結婚と家族』,岩波書店,1993,pp.44-45

山田昌弘『家族というリスク』,勁草書房,2001,pp.8-9